



雑感 神奈川の淡水魚保全の現状－I ～かなたんけんの志～

Current Status of Freshwater Fish in Kanagawa-I: Kanatanken's Ambition

勝呂尚之
Naoyuki Suguro

キーワード：絶滅危惧種，水産技術センター，市民団体，自然再生

Keywords: endangered species, fisheries technology center, civic organization, natural regeneration

神奈川県河川・湖沼の厳しい現実

神奈川県（以下、県）の内水面は、東の多摩川から西は千歳川まで、多くの河川が北から南へと流れ、東京湾または相模湾へと注いでいる。その源流は丹沢山塊に代表される急峻な溪流と多摩丘陵に代表される谷戸で、中流および下流の環境は比較的变化に富んでおり、かつてはさまざまな淡水魚類が生息していた。しかし、1960年代の高度経済成長期以降、都市化にともなう水質汚濁や開発による湿地環境の消失、ダム建設による河川流量の減少、用水路を含む河川の改修、国内外の外来種の移入、地球温暖化に伴う気候変動による水源と河川環境の悪化など、種や地域個体群の存続を脅かす様々な問題が発生し、生息する淡水魚類は非常に厳しい状況にさらされて

いる。その結果、県レッドデータブック（勝呂・瀬能，2006）では、絶滅2種、野生絶滅2種、絶滅危惧IA類7種、絶滅危惧IB類6種、絶滅危惧II類3種、準絶滅危惧10種、情報不足10種、注目種3種と、驚愕の種数がリストアップされている（種数は原著の275ページと一部異なるが、これは原著の記載ミスである）。特に、河川本流域に生息する魚よりも、ヤマメ、カジカ、ホトケドジョウ、あるいはスナヤツメ〔現、キタスナヤツメ (Sakai *et al.*, 2025)〕、ギバチ、アカザなど、湧水の直接の影響がある源流域・支流に生息する魚種が高ランクに多くリストアップされている。また、タナゴ類、メダカ〔現、ミナミメダカ (中坊編, 2013)〕およびキンブナなど、主に水田地帯の用水路やため池に生息する魚も、高ランクに掲載されていることが特徴である。

前回の県レッドデータブックの改訂後から、既に20年近くが経過したが、最近はさらに、気候変動による大型台風や集中豪雨に伴う出水の影響が目立ち（図1）、本流域が荒れて不安定な環境になっているほか、丹沢山塊の渓流域では特にその悪影響が大きく、各地で斜面が崩壊し、多くの河川に大量の土砂

かながわ淡水魚復元研究会

〒195-0053 東京都町田市能ヶ谷 5-41-9

Regeneration Research Society of Freshwater
Fish in Kanagawa

5-41-9 Nougaya, Machida, Tokyo 195-0053, Japan

Email: nao.suguro0216@outlook.jp

(2025年2月21日受付，2025年4月25日受理)

が堆積している（図 2）。そのため、溪流魚の代表であるヤマメやカジカは、生息域が大幅に縮小し、個体数の減少が顕著である（勝呂ほか，2019）。

これまでの淡水魚の保全研究と活動

著者は、神奈川県水産技術センター内水面試験場（以下、試験場）に長年勤務し、県の希少淡水魚のうち、特に厳しい状況に置かれているタナゴ類、ホトケドジョウ、ギバチ、ミナミメダカ、ヤマメなどについて、その分布や生態の調査、種苗生産技術の開発研究およびビオトープや自然水域における保全・復元に取り組んできた（勝呂，2013）。

例えば、国指定天然記念物のミヤコタナゴは、試験場の生態試験池と横浜市 M 池において復元試験を行い、繁殖生態などの基礎データを収集した（勝呂・戸田，1998；勝呂，2013）。その結果を応用して、現在は横浜市 S 池において復元に取り組んでいるが、定期的にかいぼりを行うことで、ミヤコタナゴと二枚貝類の繁殖・定着とも軌道に乗っており、毎年、多数の稚魚が確認されている（勝呂，未発表）。また、環境省と県の絶滅危惧種であるホトケドジョウは、種苗生産の技術を確立し（勝呂，2013），人工河川・谷戸池において長期にわたり安定的な繁殖に成功した（勝呂，2019）。そのデータを活用して、県内各地で保全・復元に取り組み、特に川崎市の生田緑地（図 3）、厚木市の多々良沢やあつぎこどもの森公園では、定期的な調査を行いながら、長期的な保全・復元に成功している（勝呂，2019；榎本・勝呂，2025；住倉・勝呂，2025）。また、県民に人気のあるミナミメダカについても、小田原市（図 4）、藤沢市、三浦市（図 5）などにおいて、市や市民団体と協働し、保全研究や対策を行ってきた結果、各系統ともにビオトープや自然水域での保全に成功している（勝呂，2013）。

他方、環境が劇的に変化している丹沢の渓流域においても、丹沢大山総合調査の水生生物チームとし



図 1. 台風で増水した相模川・大島付近.



図 2. 台風で崩落した丹沢・酒匂川の源流.



図 3. 生田緑地・ホトケドジョウ復元池の採集調査.

て調査を主導し、神奈川ウォーター・ネットワーク（以下、KWN）や日本大学と連携して、在来系の丹沢ヤマメの調査研究や人工産卵場造成（図 6）などの保全対策を実施してきた（勝呂ほか，2007；金子ほか，2007，2015）。さらに魚種別の保全研究のみならず、河川管理者と連携した魚道や多自然護岸の設計・施工および魚類相調査への助言、公園や学校との連携によるビオトープ造成や環境教育への指導など、淡水魚保全に関わるあらゆる分野でイニシアチブを発揮し、県内の内水面生態系の保全・復元に取り組んできた。これらの試験場による研究と事業は、全国でも先進的かつ柔軟な取り組みで、「他にやることがあるだろう」とか「もっと業界優先の仕事をしろ」など、県水産部署の縦割り行政的な内部批判を常に受けてはきたが、県民の皆さんからの評価はとても高く、数々の研究成果をあげ、また、現場の保全活動においても多くの実績をおさめることができた。

これからどうする？「かなたんけん」の決意

しかし、近年、県の予算縮小と人手不足の影響により、試験場の大幅な方針変更があり、その業務対象はアユやヤマメなどの水産重要魚種に限定され、水産業に特化した旧淡水魚増殖試験場へと先祖返りしてしまった。今後は、試験場が担ってきた専門性の高い部分を他の公的な研究機関や大学、あるいは市民団体が肩代わりする必要がある、とても険しい道のりである。

もともと淡水魚保全を含めた日本の自然環境行政は、大局的な方針や戦略、あるいはリストなどのいわゆる「絵にかいた餅」は数多く策定してきたが、具体的な保全・復元対策の予算はほとんどつかず、結果として現場の活動は、慢性的に人材と資金が不足しており、状況は悪化の一途をたどっている。加えて、最近では地域紛争、コロナ、大災害の頻発など、世界規模で世の中が不安定化しており、各地域にお



図 4. 小田原市・ミナミメダカの調査・査定と測定.



図 5. 三浦市のミナミメダカ復元池の採集調査.



図 6. 丹沢ヤマメの人工産卵場造成.

ける自然環境や生物多様性保全に必要なピンポイントの事業予算化は棚上げされ、関係者間ではあきらめムードさえ漂っている。

しかしながら、我々一般市民として何かできることはないのでしょうか。皆さんの中には、自然環境や生物多様性の問題解決について、「自分たち個人には直接関係のないこと、どこかの国や県のお偉方が対応してくれるもの」とのイメージを持つ人が多いのであろう。そのため、自ら積極的に行動したり、意見を述べたりする人も限られている。しかし、小さな谷戸の保全一つを考えてみても、そこから得られる知識あるいはときめきや感動を、身をもって体験しているのは、地域の皆さんなのである。その保全や復元への志とそれに伴う行動だけが、世の中の流れを変えることができる。

また、神奈川県をはじめ首都圏で生活する皆さんは、周辺に自然が少ないので、地方の人よりも自然環境への関心は逆に高いことを私は強く感じている。そもそも、人口そのものが多いため、夏休みや休日ともなると、私の地元の生田緑地や寺家ふるさと村などの数少ない都会のオアシスには、たくさんの家族連れやカップルが集まり、びっくりする程の賑わいを見せている。また、森や公園、谷戸、河川などで活動する市民団体に加え、植物、鳥、昆虫、魚類などの生き物の保全を目的とする団体も多く、その観察会やイベントにはたくさんの人が押し寄せる。しかしながら、これらの人々の自然環境への思いや希望は、行政に上手く反映できていない。逆にこのような市民の思いを結集することができれば、国や県・市町村を動かし、現場にも予算や人材を集めることができるはずである。

一方、近年の明るい要素としては、フェイスブックやインスタグラムなどの SNS が普及し、多くの情報が簡単に共有できるようになった。これは、定期的に情報を発信することで、世の中を大きく変えるチャンスと私は考えている。また、持続可能な開

発目標（Sustainable Development Goals : SDGs）の掛け声により、民間企業や諸団体の自然環境への投資は増えており、助成金を拠出したり、現場の保全活動を行ったりする会社も少なくない。

私たち、かながわ淡水魚復元研究会（通称：かなたんけん）も、これらの皆さんの思いを県全域、さらには首都圏へ、そして最終的には日本全国へ広く反映させるべく、土木、上下水道、公園、大学、小中高校、水族館、動物園、漁業・農業関係者、市民団体、企業など、様々な分野と広く連携し、できることから取り組む所存である。当会はこれらの組織のうち、特に水生生物関係の専門家やその卵である学生たちが会員となっており、過去に多くの実績を残してきた旧生田緑地の谷戸とホトケドジョウを守る会や旧 KWN の主要メンバーも合流しているので、その専門性の高さは全国有数である。

淡水魚をはじめとする水生生物にとっては、極めて厳しい時代となってしまったが、まだ、これからできることはたくさんある。私たちは専門的な知識と経験、そして神奈川の地の利を活かし、今後も淡水魚を旗印とした自然保全や復元活動を推進します。それが、日本における社会的な変革の端緒になるよう頑張りますので、今後とも皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。なお、淡水魚の現状や保全・復元の課題などについての詳細は、次号以降、魚種ごとに紹介する予定です。お楽しみに～。

引用文献

- 榎本亜矢・勝呂尚之（2025）：川崎市生田緑地におけるホトケドジョウの標識放流調査。相模・武蔵の自然探検，1：35–38。
- 金子裕明・勝呂尚之・二河成男（2015）：神奈川県に生息するヤマメ集団の遺伝的構造の比較と在来集団生息の可能性の検討。日本生物地理学会会報，70：131–139。
- 金子裕明・碓井昭司・勝呂尚之（2007）：丹沢在来ヤ

マメの生息状況. 丹沢大山総合調査団 (編)「丹沢大山総合調査学術報告書」. (財) 平岡環境科学研究所, 相模原. pp. 304–317.

中坊徹次編 (2013): 日本産魚類検索—全種の同定—第三版. 東海大学出版会, 秦野.

Sakai H., Iwata A., Watanabe K. & Goto A. (2025): Taxonomic re-examination of Japanese brook lampreys of the genus *Lethenteron* with descriptions of two new species, *Lethenteron satoi* sp. nov. and *Lethenteron hattai* sp. nov., and re-description of *Lethenteron mitsukurii*. *Ichthyological Research*, 72: 289–319.

勝呂尚之 (2013): 日本産希少淡水魚の保護増殖に関する研究. 近畿大学農学部紀要, 46: 133–248.

勝呂尚之 (2019): ホトケドジョウの保護と生息地復元. 倉本 亘 (編)「絶滅危惧種の生態工学 生きものを絶滅から救う保全技術」. 地人書館, 東京. pp. 153–163.

勝呂尚之・遠藤健斗・金子裕明 (2019): 丹沢溪流魚

の危機! ~ヤマメおよびカジカの分布域の縮小~.

2019 年度日本魚類学会年会講演要旨, 79.

勝呂尚之・金子裕明・糸井史朗・石綿進一・齋藤和久

(2007): 丹沢の溪流魚の危機 魚類調査総括. 丹沢大山総合調査団 (編)「丹沢大山総合調査学術報告書」. (財) 平岡環境科学研究所, 相模原. pp. 275–279.

勝呂尚之・瀬能 宏 (2006): 汽水・淡水魚類. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 (編)「神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006」. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原. pp. 275–298.

勝呂尚之・戸田久仁雄 (1998): 生態試験池を使用したミヤコタナゴ自然繁殖試験. 水産増殖, 46: 37–46.

住倉英孝・勝呂尚之 (2025): 厚木市多々良沢におけるホトケドジョウの生態—I~分布状況と生息密度および微小生息環境~. 相模・武蔵の自然探検, 1: 30–34.